かぜのとの
とおくの現在ほしがるしゅらは
太陽風にいどみつつ　いどみつつ
黒点がないよときみがいったから
りーまんしょっくはおこったのかな

あまとぶや
軽すぎるゆえにリアルです
双子の塔がまいちるモニタ

■講演記録――神奈川大学創立八〇周年記念講演――

私のマルクス体験と現代(1)

コルナイ・ヤーノシュ(2)
出雲雅志 訳

はじめに

カール・マルクスについて言うべきことは、すでにもうすべて書かれているかもしれません。賞賛から憎悪までじつに多くの本や論文が著されてきました。これらにつけ加えることができるのは、マルクスの仕事に対する私の「独自の見地」です。私は一九二八年に生まれたハンガリー人で、東欧人のひとりです。おとなになるころに第二次世界大戦が終わりました。祖国での戦争、ホロコースト、ナチス支配からの解放、共産党と社会主義体制の成立、一九五六年のハンガリー革命とその敗北、社会主義体制の再来、一九六〇年代の市場社会主義と「人間の顔をした社会主義」の実験およびその失敗(3)、社会主義体制の崩壊と資本主義の復活、独裁体制から民主主義への転換、今日の金融経済危機といった、歴史の大事件が私の思索に深く刻みこまれています。行きつ戻りつ何度もくり返された体制変化と大転換あるいは少なくとも政治体制の劇的変化というものが、いったい何を意味するのか――東欧に生き、いま七〇代か八〇代になった私たちだけが、一回や二回だけでなく八回も、身をもってそれを経験したといえるのです。資本主義と社会主義の比較やこれら二つの体制の特徴、そして大転換こそ、マルクスがもっとも関心を寄せ、理解しようとした世界史上の重要な変化でした。しかし私たちは、これらにた

だ知的関心をもっただけではありません。これらの変化を実際に「経験」したのです。特別な分析能力ではなく、この経験こそ、偉大で価値あるマルクスの著作に何かをつけ足す資格を私に与えてくれているものです。

神奈川大学に私が招待されたとき、二つの催しが同時に開催されると知らされました。ひとつはマルクスに関するシンポジウムで、もうひとつは神奈川大学創立八〇周年のお祝いです。ハンガリーの経済学者が今年八〇歳を迎えたことを知って――私は神奈川大学とまったく同じ年月を重ねてきました――主催者は、私の講演でこのお祝いに花を添えようと考えたのです。とても光栄なことです。ご招待に感謝いたします。神奈川大学の八〇歳の誕生日をお祝いするとともに、八〇歳の私の共感もお伝えしたいと思います。

この招待がこうした個人的な性格をもつため、私の話がごく「個人的」な色調を帯びたとしても許されるでしょう。これは、私個人の話であって、東欧知識人の集団の見解ではありません。それぞれの人生はユニークで異なったものです。しかし私自身の物語は、多くの点で「典型的」なものでもあります。私の人生は、すべてではないにせよ、他の人たちの人生とよく似ています。『コルナイ・ヤーノシュ自伝』を出版したとき(4)、たくさんの人々から「そのなかに自分自身の物語を見いだした」と言われました。きょうも同じように、私個人の人生（と深い影響を受けた歴史）のいろいろな段階でマルクスに関する私の思想がどのようなものであったのかを、お話しできればと思います。

はかりしれない豊かさをもつマルクスの生涯にわたる仕事から、ごくわずかなもののみを取りあげましょう。マルクスの思想にそれぞれ注釈を加えるだけでも完全な研究を必要としますが、ほんのわずかな時間しかありません。そのため今日は、詳しい分析的な話をするのではなく、急ぎ足になるかもしれませんが、マルクスの仕事に関わる私個人の物語を話すことによってこの大きな課題に取り組もうと思います。

マルクスに魅せられて

私は本ばかりを読みふけっているような子どもでした。むさぼるように本――名作文学だけでなく哲学や歴史も――を読んでいましたが、マルクスの著作は一九四五年まで一度も読んだことがありません。裕福な家庭にも上層中流階級の子どもが通う学校にも、マルクス主義の文献を手渡してくれるような人は誰ひとりいなかったからです。ところが一年か二年もたたないうちに、私は、自覚的なマルクス主義者であると表明するようになりました。

このように急激な変化をもたらし強く私をマルクスにひきつけたものは、いったい何だったのでしょうか。

私の多感な思春期は、反ユダヤ法の制定や潜伏と逃亡と恐怖に慄く迫害の屈辱的な経験と重なっています。ブダペストでの抑圧が終わった直後にわかったのは、父がアウシュヴィッツへ送り込まれそこで殺されたことと、長兄が労働奉仕からもどらなかったということです。私は、ヒトラー政権とハンガリーの共謀者が、戦争とジェノサイドへと祖国を駆り立てていった歴史を、自らの体験と知識から十分に理解しました。そして戦後、いくつかの新しい政党が出現したとき、すぐに私は共産党支持者になりました。迫害の危険をかえりみずに、何十年にもわたってずっとホルティー政権――ヒトラーと同盟を結びナチス支配を導いた――に対峙し続けた唯一の政党が共産党だったという思いがはじめにあったからです。そこには私の居場所がありました。そうして共産党に参加するようになったのですが、それはけっして社会主義社会への転換をめざす共産党の綱領にひかれたからではありません。そのころはまだ綱領についてほとんど知りませんでしたし、共産党員もめったにそれを口にしませんでした。

コルナイ・ヤーノシュ
ハーバード大学名誉教授

共産党が指導する青年運動の集会や講演会に参加するようになったときに、あわせて党のパンフレットも読むようになったのです。共産党のイデオロギーが性にあい、社会主義思想には説得力があるように思えました。

こうしてドイツから祖国が解放されて一年もたたないうちに、マルクスへと導かれていったわけです。私が初めて『資本論』を手に取ったのは一八歳のときです（まだハンガリー語には翻訳されていなかったためドイツ語版です）。親友といっしょに一行ずつ読み進め、ノートをとりながらじっくりと勉強しました。

ここで、いままでの話の時系列に注意してほしいと思います。若いころの私は本の虫でしたが、私をマルクスへ近づけたものは、「知的」な体験ではありません。最初に共産党の活動に参加するという「政治的」な接近が

あり、その後でマルクスの著作の影響を受けるという過程を辿ったのです。さまざまな思想体系や経済学と哲学の学派に触れ、最後にマルクスを選んだというわけではありません。実際のいろいろな運動や政党、イデオロギーのなかからひとつの政党を選び、その後に共産党からマルクスの著作を与えられたのです。

そのころ強い影響を受けた『資本論』の特色を列挙することはいくらでもできますが、ここではごくわずかなものだけを取りあげてみます。

『資本論』を読みすすむにつれ、その鋭い論理や確固とした思想と主張、厳密な概念に魅せられていきました。私は、家族や同僚から「秩序マニア」と皮肉を言われるような性格を小さいころからもっていました。粗雑さや冒険主義は、執筆や講演あるいは自由な対話においてすら耐えられませんでした。私をとりこにしたのは、マルクスの純粋で透明な理論構造と概念の明晰さです。ほどなくして、マルクスの偉大な知的構造のいくつかが数学的な言語に翻訳されました。ハンガリーの経済学者ブローディ・アンドラーシュや日本の森嶋通夫はマルクスの再生産論の説明に産業連関モデルを使い、アメリカの経済学者ジョン・ローマーはマルクスの政治経済学を主流のミクロ経済学の標準的な手法を用いて読みかえました。独創的な題材（たとえば再生産論）が正確に定義された論理的な順序でマルクスによってはじめに説明されていたため、厳格な数学的言語の使用がすべてのモデルの構築を容易にしたのです。

私はまた、後にマルクス主義者の文献を学んだとき、なにか別のものにも感銘を受けました。マルクス主義者はすべての扉を開く鍵を手に入れたのだという印象をもったのです。「普遍的」な説明力を有する分析装置と概念体系をもっているため、考察の対象がどんな歴史事象や経済問題だとしても、あるいは舞台公演でさえも、マルクス主義者の手にはすべてを分析できる道具がある――この感覚がマルクス主義者に優越感をもたらしたのです。X・Yは、長いあいだ研究し、資本主義の初期段階についてはより詳しいかもしれないが、私と違って彼はマルクス主義者ではない。だから私のほうが彼よりも歴史区分についてより深く理解している。あるいは、批評家のN・Nは、文学の鑑賞に優れ、演劇では専門家かもしれないが、彼はマルクス主義者ではない。だから私のほうが彼よりも演劇の本当の美徳と問題とを見極められるのだ、というように。

若い知識人というのは「世界の一般的な説明」を切望するものです。あるひとは神への信仰――おそらくは宗教的信条――のうちに包括的な説明を見出し、近代的な訓練を身につけた経済学者や社会科学者の多くは、人間

のあらゆる努力や社会の出来事を合理的選択理論によって説明するでしょう。普遍的な説明手段への強い欲求は、私の場合、マルクス主義によってもたらされました。私が思いおこすのは、取るに足らない好事家ではなく、世界的に著名な哲学者のルカーチ・ジョルジュや経済学者のヴァルガ・イェネーのような同時代の同郷の人々です。私は、あらゆる問題への鍵をしっかり握りしめることが可能なマルクスとその偉大な後継者を、少しずつ知るようになったと感じていました。

三つめにひかれたのは、今まであげた二つの点と関連しますが、マルクスが抑圧と迫害の原因に熱心に関与しているという点です。戦争の最後の年である一九四四年、運悪く私は、居心地のよい中流家庭から引き離されてしまいました。数ヶ月のあいだ煉瓦工場で肉体労働に従事させられたのです。やせっぽちのよく働く若者を、工場の労働者は温かく迎え入れてくれました。しかし私が労働者の家でみたものは、私が住んでいた広くて優雅な住まいとは比べようもない狭い住居と、私の家にはありあまるほどあった食料とは正反対のわずかばかりの配給食料でした。そこで私は連帯意識を培ったのです。『資本論』は驚くべき読みものですが、同時に、温かみのある人間的な感情をともなった冷静な経済分析と搾取に対する憎悪との不可分の結合でもあるのです。

幻想からの目覚め

ここで時間を少しとばして終戦直後に話を進めます。時がたつにつれ、私はマルクスとその後継者の教えにますます熱中しました。しかしそれも一九五三年のスターリンの死と、共産党支配の画期となったその後の時期までのことです。それは私の思想にも転換をもたらしました。

またしてもこの転換は、マルクスの教えを批判した文献を読んだからというような知的な地平で起きたわけではありません。本や雑誌に公表された批判によってマルクスが根本的な点で誤っていると確信したわけではなく、まったく別のことに打ちのめされてしまったのです。それは、これまで私が堅固に組み立ててきた「思想」の体系ではありません。「信頼」です。なんの罪も犯していないのに、古参の共産主義者だった年上の同僚が逮捕され、拷問されました。それまで私は、共産主義の名のもと、共産党の最高幹部の命令にもとづいて、秘密警察が拷問によって偽りの自白を強要していることなど、まったく知りませんでした。しかしこの事実が、私の信念を支えていた「モラル」を崩壊させたのです。共産主義の名のもとにこうしたことが行われたとすれば、何かが腐っていたにちがいありません。

ふりかえってみると私は、この変化が訪れる前、ある種の精神的な防衛機構を築いていたのだと思います。共産主義思想に心酔していたため、マルクス主義や社会主義の教義に反する思想の侵入を許さないよう障壁を設けていたのです。したがってマルクスに異議を唱える文献を私の前に出してもなんの役にも立ちませんでした。偏見に満ちた敵の声をもつ主張にすぎないと退けていたからです。受け入れている思想をその反対の思想と比較し評価するなどということはまったく必要ないと考えていました。ところで、こういった精神状態は、確信を持った共産主義者だけに限られてはいません。「狂信」的に何かを信じこんでいるすべての人にみられるものです。異端審問の検事や判事、自爆テロを送りこむテロ組織の幹部、福音伝道者、原理主義の説教者、それに確信を抱いたカリスマ政治家は、知性と教養を備え高い知的能力をもっているかもしれませんが、その狂信的な信念に反対する主張を頑固に拒絶します。頑なな信念を支えているモラルをもつこのような人たちを、冷静で合理的な議論によって説得することは不可能です。

ところが突然この「倫理的」な基盤が崩れて門戸が開かれ、批判的な思想が一気に私のなかへ流れ込んできました。ここで私の物語の教訓について話してみたいと思います。今度もまた何かが、狭い意味での知的な転換点に先立ちました。今回はしかし、政治的な地平ではなく、それに先行する出来事がモラルのうえで起きたのです。いったん門戸が開かれると、私は論争を開始しました。新たに認めるようになった批判に照らして、私のかつてのマルクス主義の思想と方法をひとつずつ再検証したのです。新しい思想への入り口をみつけ、ただちに知的な地平をも批判するようになりました。私の思想の周辺にまだ取り残されてはいましたが、以前であれば追い払っていた問題を取りあげるようになったのです。

当時、私は経済問題を扱うジャーナリストでしたから、たくさんの無駄や無規律、劣悪な品質、不足などといった問題が山積していることに気づいていました。しかしマルクスの政治経済学から、これらを分析する手助けになるようなものは何ひとつ得られませんでした。明白な経済問題に本質的なことを何もいえない経済学とは、いったい何なのでしょうか。問題は、まちがった回答を出したということではなく、言及すらしていないということなのです。そこで私は、マルクスに敵対する理論を真剣に研究しはじめました。すると新しい世界が目の前に開かれたのです。それらは、良くも悪くも、明らかに未解決の経済問題に取り組んでいました。いくつかの問題は、資本主義経済の用語でのみ語られていましたが、資本主義のもとでよりも社会主義の経済条件のもとでいっ

そう重要な「普遍的」な問題（たとえば効率や生産と必要の様相、需給関係など）にも目をきちんと向けていました。

マルクスとその追随者が提唱してきた理論的な命題についても、私は疑いをもつようになりました。ひとつの例は、マルクスがくり返す貧困の蓄積です。『資本論』の「資本主義的蓄積の一般的法則」の章で「一方の極での富の蓄積は、同時に反対の極での……貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的堕落の蓄積である」とマルクスは述べています(5)。マルクスの信奉者も、労働者階級の相対的ないし絶対的な貧困化によく言及しています。しかしそれとは反対に、海外への旅での表面的な印象もあらゆる信頼できる統計も、先進資本主義国において自らの労働で生計を立てている人々の平均的な生活水準が、一世紀以上にわたって実質的に向上してきたことを示しています（もちろん、貧困がもうなくなったなどとは思っていません）。これで少なからぬ誤解を容易に解くことができます。プロレタリアの貧困化の予測こそ、マルクスが主張する結論を導くうえで中核的な役割を担っているからです。増加する大衆のあいだの継続的な貧困の増大が事実であれば、怒れる大衆がもうずっと前に資本主義を打倒してしまっていたことでしょう。

数年にわたる学習をとおして私は、マルクスの教義に対する批判的知識を着実に身につけていきました。その結果、マルクス経済学の理論的命題が、ますます本質的に受け入れられないものとなってきたのです。そうして最後には、研究の進展によってより明確に説明されるようになった価格、賃金、費用、利潤の現実の動きに照らして、労働価値論を否定する地点にまで到達しました。

社会主義体制に対する知的責任

一九五六年のハンガリー革命の前に話をもどしましょう。一九五〇年代半ばまでに私は、熱心で純粋な社会主義の信奉者からその体制のもっとも鋭い批判者になっていました。

しかし私と同じ世代のすべての仲間が、同じようなペースと形で知的転換を遂げたわけではありません。古い考えをすべて一挙に捨て去った人もいれば、イデオロギーの断片をその全滅から守るために一歩一歩捨てていった人もいます。また思想をすばやく変えた人もいれば、何十年もかかった人もいます。しかし結局は、重大な歴史劇が知識人とすべての仲間に、知的転換をもたらしました。マルクス主義者や共産主義者となった人々を驚愕させる事件が起きたのです。一九五六年のハンガリー革命とその暴力的な鎮圧がそれです。もうひとつは一九六八年のプラハの春とその制圧です。その後、ポーランド

で「連帯」運動が活発になると、逮捕や非常事態宣言が続きました。こうして昔ながらの世界観の断片を守ろうとしていた人たちでさえ、強い疑いを持つようになったのです。私たちみんなを苦しめたのは、二〇世紀の根本的な問題のひとつ、つまり「現存する社会主義」として知られていたものとは、本当はいったいどんな体制だったのか、ということです。私たちが体験した苦痛――技術的後進性がもたらす飢餓と慢性的な不足、思想の自由の否定と残虐な警察のテロ、そして強制労働収容所――は「必然的」なものだったのか。それとも、すべての苦しい経験は、マルクスとその理論、彼の行動計画の提唱とは何の関係もなく、じつに嘆かわしい誤った実践がもたらしたゆがみだったのでしょうか。

言いかえれば、その弟子たちによって支配されていた、レーニン、スターリン、フルシチョフ、ブレジネフのソ連や、毛沢東の中国、その他の共産主義諸国で起こったことにマルクスは責任を負うのか、ということです。

カール・マルクスがまったく同じ人間として、彼自身の時代ではなく、二〇世紀に生きていたとしたらどうしただろう、と多くの人たちが想像したと思います。たとえばブダペストで。はじめは共産主義者になるかもしれませんが、その抵抗の精神は、すぐに共産党政権への対抗者のなかにマルクスをおいたことでしょう。一九五〇年代には強制収容所へ送られたかもしれません。それでも生き残ったとすれば、一九五六年のハンガリー革命に先立つ知的論争に加わっていたでしょう。革命家のなかに入って、その後の逮捕のうねりを逃れえたとすれば、地下出版の形をとってソビエト型経済を辛らつに批判したにちがいありません。人間マルクスとその批判的な性格、尊敬すべき勇気、原理への献身について考えるのは楽しいことです。しかしいまは、本当の問題、つまりマルクスの理論的思考と社会主義体制の歴史的現実との関係について考えなければなりません。はじめにそれに端的に答えておきましょう。マルクスの計画は社会主義体制――素晴らしいユートピアではなく、現存し私が生きてきた――によってじっさいに「実行」されたのです。

おそらく今日の参加者のなかにも、このような厳しい私の発言を聞いて驚かれた人がいるだろうと思います。しかし私はくり返します。一九一七年から共産主義諸国にあらわれ一九八九年まで現存したのは、基本的にはマルクスが資本主義におきかえようとした社会主義体制が実現したものだったのであり、私の主張の正しさはその歴史的事実によって支持されると信じています。

マルクスの一連の思想の中心にあるのは、私的所有によって特徴づけられた資本主義の所有関係です。資本主義の廃絶は、生産手段の社会的所有を意味します。私的

所有が支配しているかぎり、人間の協同、財の交換、生産力の分配は、市場によって調整されます。しかし市場は悪い調整者であり、不透明で無政府的です。一方、社会的所有は、生産力と人間労働の分配を、最終的には透明で計画的なものにします。

私の主張を裏づけるためにマルクス自身の考えから二つほど引用したいと思います（これらはその追随者によって希釈されるか誤解されるかしたものではありません）。はじめに『資本論』からです。「資本独占は、それとともに開花しそれのもとで開花したこの生産様式の桎梏となる。……資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される」(6)。もうひとつマルクスの重要な言葉があります。「……資本主義的生産の宿命である不断の無政府状態と周期的痙攣……」。これは『フランスにおける内戦』に書かれています。また、これと同じ段落でよく引用される「共同計画」についてはこう書かれています。「……協同組合の連合体がひとつの共同計画にもとづいて全国の生産を調整し、こうしてそれを自らの統制のもとにおき……」。

これらの理論的な命題とソ連その他の共産主義諸国で生まれた社会主義体制の現実とを比べてみましょう。現実の体制の二つのきわだった特徴こそ、まさにマルクスが予想しさし示していたものでした。第一。生産手段の私的所有の廃止にきわめて近づき（その残滓は制約された形ではあちこちに残っていましたが）、かわって主として国家所有という形態で社会的所有が支配的になりました。第二。市場による調整の廃止にかなり近づき（闇経済やグレー経済は残っていましたが）、かわって中央計画、官僚統制、統制経済が支配的になりました。

私はいま、社会主義体制の二つの二次的な側面を適当に取りあげたのではありません。経済秩序の二つの「根本的」な特徴に言及したのです。

偏狭なマルクス主義者と議論すれば、スターリン主義や毛沢東主義の政権がマルクスの名前をまぎらわしい象徴として使っただけであって、現実には彼らのあいだには何の共通点もない、と反論するでしょう。しかし私はたったいま、マルクスとエンゲルスを引用してこの反論に闘いを挑んだのです。これらの政権は、マルクスが提唱した偉大な歴史的事業を実行するために、マルクスを引用するあらゆる権利をもっていました。

（ここで注意しておきます。政治的な儀式のために壁に掲げられた「守護聖徒」としてのマルクスのイメージを利用するという考えは、本当の政策を隠ぺいする今日の中国共産党にあてはまります。中国共産党はマルクスを引用して誤ったイデオロギーを提示しています。支配的な所有形態が私有であり主たる調整機構が市場であれ

ば、その体制を基本的に支配するのは当然にも資本家です。したがって明らかにその反対のことが、マルクスが晩年の一〇年ないし二〇年のあいだ彼の計画として提起したものであり、中国やその他の社会主義国の初期に実現されたものなのです。）

マルクスの教えの頑なな擁護者は、ロシアのボルシェビキやその他の国の追随者がマルクスの移行計画を成しとげたとするあからさまな主張に直面するのを好みません。私は一度ならずこのことを体験しました。いくつかのアメリカの大学で、自らを「急進的な経済学者」と呼ぶ優秀で興味深い学生たちと出会いました。彼らは政治的に受け入れられるとみなした文献を熱心に学んでいました。主流派の経済学の理論や方法をも徹底的に勉強していたのです。ところが、ソ連や東欧の共産主義経済を勉強することは軽蔑していました。これは、そのことへの関心の欠如、おそらくより適切な言い方をすれば、彼らが尊敬し受容しているマルクスの思想とは無関係なものに穴をあけるなんて知ったことではない、というような嫌悪と不快感からなのでしょう。しかし私の見たところ、彼らは現実に目をつぶっていただけなのです。

私が見た例は学生に限ったものではありません。この講演を準備するために、高度に熟練したマルクス理論の再解釈者の文献を偏見をもたずに読んでいるときにもありました。その最良のものでさえ、マルクスの社会主義計画をソ連や改革前の中国あるいは東欧の共産主義諸国の歴史的経験と比較するのを控えていることを知って、私はたたきのめされてしまいました。しかもレーニンにもスターリンにも触れていないのです。

知的で政治的な誠実さは、「マルクスの思想と実現した社会主義体制とのあいだにはどんな共通点があるのか」「マルクスとレーニンやスターリンとのあいだにはどのような共通点があるのか」という問いに立ち向かうことを私たちに求めるはずです。私はこの問いに直截に答えようと試みました。これに反論することはできても、この問いそのものの妥当性を否定することはけっしてできません。

民間主導と市場調整を廃止された経済では上位の管理規制に頼らざるをえず、原則と教育を上から管理され押しつけられる機構となります。社会主義体制は抑圧なしには機能しえません。抑圧機構がなくなれば、遅かれ早かれ、体制は崩壊します。これがソ連で起こり、ソ連が崩壊しはじめると、東欧の共産主義諸国も崩壊しました。

これは、独裁と民主主義に対するマルクスの見方と関係します。彼自身もおそらく、秘密警察チェーカーの拷問部屋やシベリアの強制収容所で行われたことを目撃していたら、恐ろしい思いをしたことでしょう(7)。しか

し、それらを紙の上で表明しただけだったので、マルクスもエンゲルスも、形式的なブルジョア立憲政治、議会主義、民主主義を空虚なものとみなして嘲笑し、それにかわってプロレタリア独裁を唱えることができたのです。

私は、カウツキーとレーニンのあいだの有名な論争――カウツキーの「プロレタリアートの独裁」（一九一八年）とそれへのレーニンの反論『プロレタリア革命と背教者カウツキー』（一九一八年）――を読み直してみました。カウツキーは多少、客観的な調子で書いていますが、なお議会制民主主義を正しいとみています。彼が心配したのは、プロレタリアートの利益が、大衆の意思の抑圧、権力の乱用、少数派の非保護への弁解になるのではないか、ということでした。それに対してレーニンは、カウツキーのすべての論点に辛らつな軽蔑と侮蔑を投げつけ論破しようとしました。しかし今ふりかえってみると、カウツキーの心配のすべてが正しかったことが証明されます。レーニンではなくカウツキーが――マルクスとエンゲルスの解釈にただひとつだけ重要な例外がありますが――正しかったのです。ところが、カウツキーではなくレーニンがこの二人の偉大な予言者の思想から説得力のある引用をしています。レーニンはマルクスのよく知られた言葉「……労働者が、ブルジョア階級の独裁のかわりに自らの革命的独裁をおきかえる……」を引き、続いてエンゲルスから「勝利を得た政党は無駄な闘いを望まない。彼らの武器が反動者どもにまきおこす恐怖を用いて、この支配を維持しなければならない」という言葉を引用しています。レーニンはエンゲルスからもうひとつ引用し、これをカウツキーの鼻先にたたきつけます。「国家は一階級が他の階級を圧迫するための機関にほかならない。このことは民主共和国でも君主国でも、少しもかわらない」。

カウツキーは自分の意見を裏づける文章をマルクスから引用することができませんでした。それだけではありません。彼はプロレタリアートの革命的独裁に関するマルクスの文章を引用し、「残念ながらマルクスは、この独裁が何を意味するかをより正確に述べることを怠った」と厳しく批判しなければならなかったのです。

カウツキーだけでなく、いろいろな意味でマルクスに好意的な今日のどんな学者も、私がマルクスから引用した箇所で、とびぬけた政治の専門家であったマルクスが、政府や国家あるいは抑圧と自由の関係について全体的に語ったり、民主制度と人権の関係をまじめに説明したり、独裁の危険に言及したりした文章をどこにも見つけることはできません。マルクスは、この「問題」じたいを、つまり人権と自由の保障にかかわるすべての問題を無視

したからです。この軽蔑の姿勢が、レーニンやその他の忠実な追随者に深くしみ込んでいきました。

民主主義はブルジョアジーの独裁にすぎないという主張――革命によって置き換えられるべきものは別の独裁を意味する――は、民主主義と独裁のあいだの明確な区別をあいまいにするものです。ヒトラーが台頭した後ではじめて西側の共産主義者は、「形式的」「ブルジョア的」民主主義、議会主義、「法治国家」、法の遵守が、幻想などではなく、かけがえのない価値をもつことを理解するようになりました。なぜなら何よりもまず民主主義は、人々の言論の自由、日常的な政府批判、社会の急進的な変革者――マルクスも当時そうだったように、知的論争に苦しんでいる人々を含めて――を、制度的に保護するからなのです。

おそらくマルクスの時代には、民主主義と独裁の区別やブルジョア独裁かプロレタリア独裁かという問題は、まだただの口論にすぎなかったように思えます。しかし、スターリン、毛沢東、ラーコシ(8)、その他の専制を経験し生きのびてきた今日からふりかえると、これらの用語は別の意味をもちはじめます。マルクスによる民主主義の放棄が、マルクス信奉者の抵抗を抑えつづけるとともに、レーニン主義・スターリン主義・毛沢東主義の専制の拠りどころとなってしまったようです。

「責任」という言葉をここで犯罪の意味で使うことは明らかにできません。まちがった思想を主張することじたいが犯罪というわけではないのです。まして「責任」を倫理的な意味で問いただしたいのでもありません。私的所有と市場の排除を擁護したために、あるいは議会制民主主義と人権を保障する法の支配の価値をみとめなかったために、マルクスが倫理的義務に反したわけではありません。私は知的責任についてだけ話したいのです。人々に社会的行動を促すような思想を提示したとすれば、実際に行動を起こした人々とともに私は責任を負います。私の言葉の影響力が大きいほど責任も大きくなります。この点でカール・マルクスほどその思想と行動計画によって多大な影響を与えた人間はいません。

マルクスからいま学ぶこと

いったん社会主義体制が崩壊すると、もうこれでマルクスの思想も終わった、という見方が世界中の知識人のあいだにあふれました。みろ、それらは歴史によって否定されてしまったんだ！　と。マルクスは「時代遅れ」だ、もうすたれた、もう関係ない、などといったうぬぼれた文献や傲慢な論評をよく見かけます。

ところが金融危機が広がっている今日、まったく反対

の見方があらわれ、マルクスがまたはやりだしました。マルクスは、政治家やジャーナリストに再びもてはやされるようになり、マルクスの予言的な洞察が、資本主義の差し迫った崩壊の恐ろしいシナリオを支持するために引用されています。そして『資本論』がまたもやベストセラーとなっています。

揺れ動くどちらの流行も誤っています。マルクスの仕事は政治や思想の「歴史」にその名前を永久に刻んでいるばかりか、「現代」の世界を理解するうえでまだその思想のいくつかが屹立しているのです。最初に、最近のマルクス・ルネッサンスについて言わせてください。たしかにマルクスは、いかに破滅的な危機と崩壊をもたらすかという資本主義の自己破壊運動について繰りかえし予言しました。しかし、マルクスの思想を評価している学者ですら、この最後の崩壊という一連の議論に従うことは困難で、不可解な、まったくの誤りだと考えているのです。

私は予言するつもりはありませんが、私の経験によれば、世界史上の重要な変化は予想に反して起こるものです。どんな社会組織が未来に生き残るのかはわかりません。私が言いうるのは、資本主義体制の差し迫った崩壊をまだ見てはいないということと、資本主義が社会主義体制に取ってかわられるというマルクスの予言がまだ実現されてはいないということだけです。私には資本主義の土台があまりにも堅固であるようにみえます。問題は、いずれにせよこの二つの予言によってではなく、未来に起こることによって決まるということです。私たちが「いま」言えるのは、痙攣に苦しんではいるものの、資本主義はまだ「生き残っている」ということです。

新聞は毎日のように、西側世界の「ソビエト化」と称するものに関する政治家やジャーナリストの意見を流しています。しかし、いくつかの政府が財政援助を無償で行わず、そのみかえりに所有権を要求しているという事実以外のどんな説明ができるというのでしょうか（アメリカとイギリスで共産党が権力を掌握し、全力をあげてソビエト・モデルの適用に取り組まないかぎり、国家所有は再び私有化にもどるだろうということを付け加えておきます）。こうした片言の「ソビエト化」や社会主義の紹介は、マルクスについてだけでなく、ソ連の歴史や社会主義体制の真の特徴についても無知であることを示しているのです。

しかし、周期的にくり返すとほうもない信用拡大とこれが危機を誘発する効果についての、『資本論』第一巻と第三巻での見事な議論を強調しておくことには価値があります。マルクスはおそらく、信用拡大がいかに過剰生産（マルクスの用語）――つまり実需要を超過する生

産と過大な生産をもたらす過剰な能力――を生みだすかに注目した最初か最初のうちのひとりでした。この急拡大は貸し付けの連鎖が突然ぷっつり切れるまで続きます。

経済学者や金融の実務家は、この一〇年ないし二〇年のあいだ、無責任な信用拡大の危険性やリスクの誤認、信用制度の適切な規制の欠如を認識していましたし、問題を避けるよう提案さえしていたのですが、誰も耳をかしませんでした。この用心深い警告は、マルクス主義者や資本主義への急進的な反対者からではなく、事態を心配し、現在の信用行動を批判する資本主義の信奉者から、言いかえれば体制の「改革者」から発せられたのです。

さて、きょうの話の主題にもどって、マルクスの思想で今でも私にとってもっとも大切なものは何か、ということをお話ししましょう。思想と分析道具に関するマルクスの天才は私たちを圧倒します。この短い話で私は、ごく一部の主要な思想を取りあげ、それらを受け入れられないと言いました。しかし、私だけかもしれませんが、なお受容し使用したいと思っている科学的思考へのマルクスの重要な貢献はたくさんあります。いくつかの例を紹介しましょう。

企業家が、新しい商品の開発、新しい技術の導入、新しい組織形態の普及、新しい市場への参入を行う「創造的破壊」という言葉をきけば、ほとんどの人がシュンペーターを思い起こします。ここから、古い世界が破壊され、新たな世界と生産手段がこれにおきかえられて社会に組み込まれるとする、シュンペーターのいう資本主義発展論へとすすむのです。しかしマルクスとエンゲルスは、すでにこの過程を叙述していました。資本主義の創造的でしかも破壊的な力について、ずっとはやく『共産党宣言』の魅力的な最初の数行で述べています。マルクスの政治経済学において資本家は、技術革新と発展過程を組織する主要な役割を果たすのです。

マルクス前後のほとんどの経済学者は、均衡状態に、とくに需給が一致しているときの市場均衡の特殊なケースに注目してきました。この特殊な状態はワルラスの一般均衡理論として後に知られるようになりました。マルクスとともにマルサスは、市場均衡からの乖離――ワルラスの市場均衡のまわりを不規則に変動するだけでなく、長期にわたってそこから離脱する――の研究をすすめた開拓者のひとりです。マルクスはとくに、一時的にではなく、「恒常的」に供給が需要を上まわる労働市場に着目しました。マルクスは、これを人口統計学からではなく経済学から説明しようとして、「相対的過剰人口」という用語をあてたのです。今日でも、つねに労働供給が過剰となるような同じ現象は、労働経済学でいう不完全雇用均衡として知られています。マルクスがこの開拓的

先駆者であることをほとんどの人が知りません。市場均衡からの恒常的な乖離を研究し説明することがいかに重要かということを、私は主としてマルクスから学んだと言わなければなりません。

「資本主義」という用語がどのようにつくりだされ、また学術的思考へ導入されたのか、確かな歴史はわかりません。しかし、多くの政治家や評論家、社会科学者が、現実の資本主義体制とマルクスの時代に要望され予言されただけの社会主義体制の新しい世界とを比較するうえで、「資本主義」という概念をながいあいだマルクスとその学派に関連づけてきた、と言ってもまちがいではないでしょう。マルクスはユートピアとしてではなく歴史的現実として社会主義体制を構想し、たしかにそれは実現されました。このような概念の枠組みは、マルクスの生産様式の発展段階論に合致しています。

いまでも私は、マルクスの思想構造の重要な構成要素から強い影響を受けています。私の著書のひとつで「システムパラダイム」――政治的領域や文化、知的領域、経済といった社会の断片や連結した「部分」を切り離すのではなく、部分がつくりあげる「全体」に焦点をあてる見方――という言葉を使いました。この理由から、さまざまな部分が相互にどのように関係し影響しあっているかに着目するわけです。システムは、静止したスナップ写真にではなく、歴史に展開する動態のうちに描きだされます。マルクスは、システムパラダイムの偉大な開拓者であり、比類のない実践家でした。マルクスは同時に、経済学者、社会学者、政治科学者、歴史家でした。当時「学際的」という言葉はだれも使っていませんでしたが、マルクスは、閉ざされたせまい専門領域の境界をいかに乗り越え、総合的な社会科学者としてどう研究しうるのか、ということを身をもって示したのです。

私はよくマルクス主義者かどうかを尋ねられます。私は明確に否定します。また、オーストリア学派とみられたり、ケインズ学派や新古典派あるいは新自由主義などと呼ばれたりもします。そのたびに私は首を横にふります。どのような「主義」であれ、私はその無条件の追随者ではありません。だれがそうしようとも、私自身はどんな枠にもはめられたくないのです。むしろ私の思想の要素は――エンゲルスの皮肉な言葉を使えば――雑多なものをごちゃまぜにする貧乏人のスープのようなものだと言いたいほどです。さらに、ひいき目にすぎるかもしれませんが、さまざまな学派の思想を統合しようと努めたのだとさえ言いたいように思います。私がもっとも影響を受けた人が誰かをどうしても答えるよう問われれば、シュンペーター、ケインズ、ハイエクの名前をあげます。しかしそのなかで私が筆頭にあげたいのは、カール・マ

ルクスです。

訳注

(1) 英語のタイトルはMarx through the Eyes of an East European Intellectual. この講演は、神奈川大学創立八〇周年記念行事のひとつとして、二〇〇八年一二月六日に神奈川大学セレストホールにおいて三〇〇名の聴衆を前に行われた。ただし本稿は、このときの講演原稿に加筆修正された英文原稿をもとにしている。なお、この原稿にある詳しい注と文献目録は訳出していない。本誌に掲載するにあたって講演（口調）の体裁をとったためである。あらかじめお断りしておきたい。

(2) Kornai János. 一九二八年ブダペスト生まれ。一九四八年―一九五四年ハンガリー共産党機関紙記者。以後、ハンガリー科学アカデミー経済研究所研究員、ハーバード大学教授などを歴任。現在、ハンガリー科学アカデミー会員、ハーバード大学名誉教授、ブダペスト高等研究所名誉研究員。なお、日本と同じようにハンガリーではファミリーネーム（コルナイ）・ファーストネーム（ヤーノシュ）の順となるので、ここではそれに従う（以下同じ）。

(3) 一九六八年にチェコスロバキア共産党の第一書記に就任したアレクサンデル・ドプチェクが掲げてから「人間の顔をした社会主義」は自由化と民主化を象徴する言葉となって広がった。

(4) 盛田常夫訳『コルナイ・ヤーノシュ自伝』日本評論社、二〇〇六年。この自伝は、はじめ二〇〇五年にハンガリー語で出版された。次いで日本語と英語、そしてロシア語、ポーランド語、ベトナム語の各国語版が刊行され、中国語版がこれに続く。

(5) 『資本論』第一巻第七篇第二三章の一節。

(6) 『資本論』第一巻第七篇第二四章「いわゆる本源的蓄積」にある言葉。

(7) チェーカーはレーニンによって創設された人民委員会直属の秘密警察組織の通称。シベリアで服役と労働が強制された収容所（ラーゲリやグラーク）は、とくにスターリン時代に拡大し利用された。

(8) ラーコシ・マーチャーシュ。一九四五年―一九五六年にハンガリー共産党書記長（党名変更後はハンガリー勤労者党第一書記）を務めた。

（ハーバード大学名誉教授・ハンガリー科学アカデミー会員）

研究の周辺

幼い娘がしてくれた構造人類学のレッスン

――レヴィ＝ストロースの贈り物――

小馬　徹

昨年十月末、レヴィ＝ストロースの訃報が伝えられた。大変な高齢であったことを思えばいささか奇妙なのだが、その一報がひどく唐突に思え、鋭く胸に突き刺さった。彼が、齢を重ねるとはまるで知を（核分裂ではなく）核融合させることでもあるかのように、いよいよ瑞々しい論稿を世に問い続けていたからであるに違いない。享年百歳。俄な、そして安らかな最期だったようだ。

一　最良のフィールドワーカー

レヴィ＝ストロースの数多い著作のどれかの最後の頁を閉じた後、深い吐息と共に、世界が全く違って見えるという思いに浸った人は少なくないだろう。本物の学問とは、心底人を驚かせるばかりか、今自分が依って立っている地盤を根底から揺るがせて、不安に陥れさえもするものだ。そんな感慨に貫かれた重い衝撃が、しかし同時に、今や装いを改めた世界へともう一度冒険に赴く勇気を与えて、奮い立たせてもくれたはずである。

レヴィ＝ストロースの最も目覚ましい成果とされているのは、親族研究と神話研究である。壮大なスケールで展開されるその強靱無比な論理展開は、彼の哲学者としての稀有の才能があって初めて可能なものであり、凡百の人類学徒の説を一蹴して圧倒し去る力をもっている。

その反面、人類学の学問的アイデンティティの基盤である長期の参与観察（participant observation）としてのフィールドワークは、彼の場合、初期に行ったアマゾンのナンヴィクワラの人々の間でのものが最長で、それもせいぜい三週間程度だという批判が執拗に繰り返されてきた。端的にいえば、人類学者としては一種のアマチュアだと難じられているのである。しかし、果して本当にそうなのだろうか。

私は、大学院時代に実証を旨とする社会人類学の訓練を受け、レヴィ＝ストロースとは逆に長期のフィールドワークに魅せられて、それに基づく研究を長く続けている。その私か

神奈川大学評論

The Kanagawa University Review

特集＝ベルリンの壁崩壊20年

——歴史から未来へ

対談 ベルリンの壁崩壊20年——世界と日本はどう変わったのか…… 見田宗介／藤原帰一

特別寄稿 モツ煮込みの妥協…… エステルハージ・ペーテル　訳 早稲田みか

評論 酒井直樹・大澤真幸・下斗米伸夫・三島憲一・岩間陽子・文京洙・後藤政子・的場昭弘・後藤仁

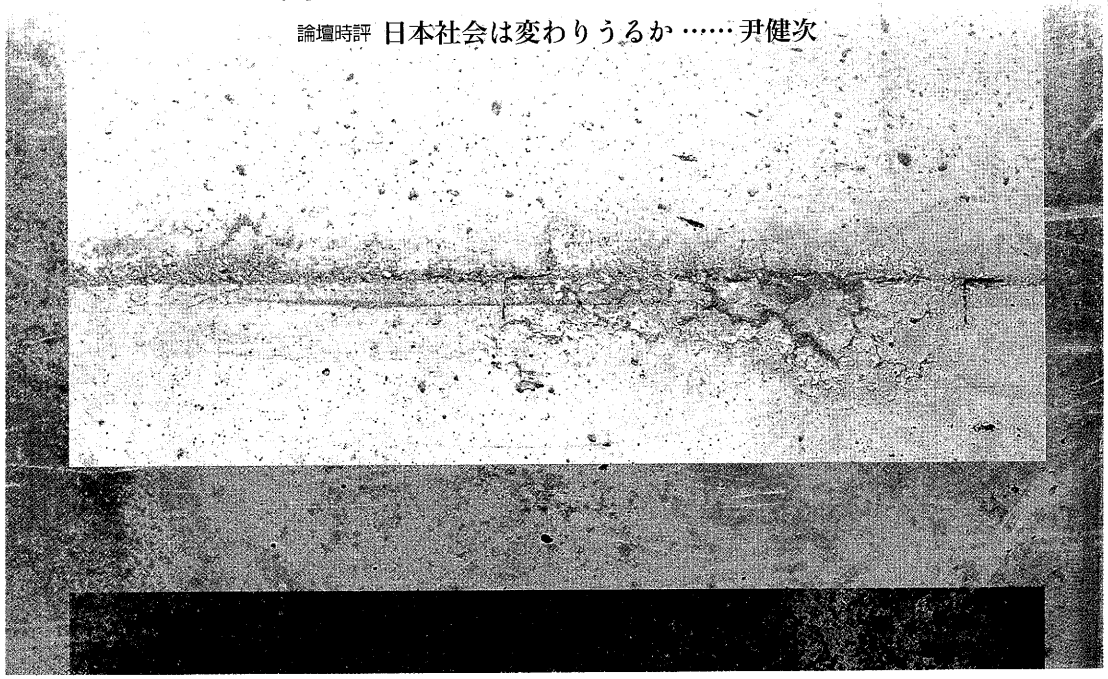
詩 太陽視覚…… 水無田気流

エッセイ 宇宙の微塵となりて…… 鎌田慧

講演記録 私のマルクス体験と現代…… コルナイ・ヤーノシュ　訳 出雲雅志

論文 戦後断絶期の中国観 1946－1952（9）…… 田畑光永

論壇時評 日本社会は変わりうるか …… 尹健次



65 2010　神奈川大学

二〇一〇年三月三一日第六五号発行（年二回発行）　神奈川大学評論　第六五号

神奈川大学評論　特集＝ベルリンの壁崩壊二〇年——歴史から未来へ

65 2010

◎新刊

掘り進められた神奈川の遺跡

旧石器から近代まで

(財)かながわ考古学財団編　B5・二二〇頁　定価二四一五円

日本最古級の石器群、多様な変化をみせた縄文土器、生活を彷彿とさせる弥生時代の木製品、新発見の大型古墳、古代相模の官衙、中世の都市鎌倉や戦国時代の城郭、江戸城築城のための石丁場、かつての横浜居留地で発見された外国商館のタイルや赤煉瓦など、神奈川県域の地中にはさまざまな時代の人々の生活の営みが記録されていた。本書は、かながわ考古学財団の研究者が発掘調査の成果をもとに、約二〇〇か所の遺跡を五〇〇点のカラー図版を用いて解説する。

◎好評発売中〈有隣堂創業一〇〇周年記念出版〉

開港一五〇周年記念

横浜　歴史と文化

(財)横浜市ふるさと歴史財団編
高村直助(同財団理事長・東京大学名誉教授)監修

A4上製・函入　三五二頁　定価七三五〇円

安政六年（一八五九）の開港時、戸数僅かに百戸といわれた半農半漁の村は、人口三六〇万人を超えるわが国第二の都市へと発展した。本書は横浜市ふるさと歴史財団が、長年の研究と収蔵資料を駆使して、原始・古代から現代にいたる横浜の歴史と文化を紹介する。カラー図版、八五〇点以上を収録。

有隣堂　本　社／〒231-8623 横浜市中区伊勢佐木町1-4-1　http://www.yurindo.co.jp/〈定価は税込〉
出版部／〒244-8585 横浜市戸塚区品濃町881-16　電話(045)825-5563 FAX(045)825-5530

◎美的経験の《否定性》とは何か。芸術の自律性と至高性の二律背反は解消できるか

クリストフ・メンケ著——菊判・三七〇頁・七三五〇円(税込)

柿木伸之・胡屋武志・田中 均・野内 聡・安井正寛 訳

芸術の至高性——アドルノとデリダによる美的経験

フランクフルト学派の新世代がアドルノ美学の核心を記号論・解釈学・分析哲学を駆使して明快に読み解き、デリダの脱構築理論と対決させた先駆的研究。

◎「変革のアソシエ」『年誌』創刊号

伊藤 誠・本山美彦編——A5判・四〇〇頁・二六二五円(税込)

危機からの脱出——変革への提言

本書は「変革のアソシエ」の設立趣旨に沿って今日の危機的諸相を研究者、実践家、作家、詩人、批評家たちが、鋭く批判する論集。

◎旧日本租界とそれに類似する特権を有した地区の歴史と現況

大里浩秋・貴志俊彦・孫安石編著——A5判・三五二頁・五八八〇円(税込)

中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産

中国だけでなく朝鮮半島にもあった日本租界、清国租界にも注目しそれらの比較と、旧租界建築の保存と再生に向けた建築史からの分析。

◎ジェンダーの表象と社会実践の相関関係の多様さと複雑さを例証

村井まや子編——A5判・二六八頁・四八三〇円(税込)

ジェンダー・ポリティクスを読む——表象と実践のあいだ

家父長制社会における文化的表象の分析と、法的・制度的な権利の要求の歴史との間の、密接な相互関連性を浮かびあがらせる。

◎社会主義市場経済体制下の労働者集団と民主化のゆくえ

石井知章著——A5判・二二四頁・二六二五円(税込)

現代中国政治と労働社会——労働者集団と民主化のゆくえ

民主化への参加プロセスと制度的布置の分析を通して人民共和国成立前・後の歴史的パースペクティブから現代中国の政治と労働社会を照射する。

御茶の水書房　〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 Tel.03-5684-0751
ホームページ http://www.ochanomizushobo.co.jp/

定価 850 円　ISSN 0913-4409
（本体価格 809 円）